

むすびー「まとめ」に代えて

あの熱気に溢れた原子力平和利用の船出から今日までの出来事を、本邦初公開のエピソードを交えながら振り返って見た。「軍事利用の拒否」を国民合意の基本に、平和利用推進は、最初の十年、千九百七十年頃までは官民学、それに社会党・共産党を含む政界あげての完全な合意のもとに進められてきた。そして今、日本の全電力の三十%以上を原子力で賄っているに係わらず、原子力に対する社会の目は、きわめて懐疑的なものになっている。本書を通読された明敏なる読者は、こうなった理由の大半をつとに読み取っておられると思うが、筆者なりに問題点を三つに整理して、「むすび」に代えたい。

まず軍事利用との関連である。原潜入港問題で設計も知らされないまま「平和利用」の番人たる原子力委員会の「安全宣言」にたんを発し、平和利用も所詮は日米安保の核の傘という雲の下にあることを痛感させられる。核搭載疑惑や「作らず持たず持ち込ませず」の国会決議を経てなお、IAEAの査察問題や最近の日本のプルトニウム利用に対する外国からの疑惑など、軍事利用の暗雲がやはり平和利用のうえに重苦しく立ち込めている。核兵器廃絶は日本国民の悲願である事は言うまでもないが、平和利用関係者自身がその意思を明確にすることは、平和利用を国民合意のもとに進める上での大前提である。原産有澤会長が一九六六年の国連軍縮総会にその意思を訴えたメッセージを送ったのも、その行動の一つであったが、その中にもあるように、核兵器の全廃をまって始めて、「平和利用の完全な開花」が期待できる。

二番目に、原子力関係者が、（結果的に）嘘をついた、或いは都合の悪い情報を隠した出来事も結構少なくなかった。原潜放射能漏れ、外国で実証済のはずの軽水炉の故障の続出、「むつ」の放射線漏れ、敦賀炉の燃料折損隠し、敦賀湾内放射能検出、分析研データ捏造事件、……。いずれも放射線や放射能はごく微量で安全上問題になるものでは全くないのであったが、前言や説明との明確な食い違いは、恰好の攻撃材料となって、新聞記事の大きさと、「放射線はどんあに微量でも害がある」という誤解（この誤解には原子力関係者にも若干の責任があるが）と相まって、一般の方々は勿論、原子力側からの説明の届かない識者の方まで、原子力は嫌なもの、胡散臭いという印象を蓄積してきていたにちがいない。「もんじゅ」のナトリウム漏れという技術的には些細と言っている、「マッチ一本」の出来事で、かくも大きな反響をよんだ、その薪となったもの、それはこんな「乾いた」国民の気持ちであった。

三番目に外国からの危険情報、その最たるものは言うまでもなくチェルノブイリ事故、その前にも、故障やTMI事故にECCSの確認実験の失敗など、その都度日本の炉との設計や運転方法や「あんぜん文化」の違いを説明して、影響の緩和に関係者は努力してきた。シカシ、チェル大事故は規模が桁違いであり、輸入食品にまで測定可能な放射能がふくまれ、その規制が各国まちまち、といったことも、一層不安を増大した。ソ連崩壊直後のことだけに、混乱を極める情報に加え、チェル現地住民の生活状況と不安への同情が盛り上がり、どこまでが事故影響かも不明のまま、世界中の原発不信をかき立てた。チェル炉が西欧や日本の炉とは基本的に違う軍事兼用のものであることなど、いくら説明に努めても、一方「明日にも日本に大事故、娘が可愛そう・・・」とデマる「危険な話」という本が数十万部も売れては、その沈静化は用意ではない。放射線影響については、WHOの十年にわたる調査の結果が発表され、一般住民に対する影響について、小児だけに甲状腺ガンの増加が伝えられる^③以外、影響は無いと報告されている。（小児甲状腺についてもデータ上放射線の影響とまだ結論されていないが）本文中でも触れたように、放射線影響の評価については、色々の混乱があり、この問題はまだまだ尾を引くことであろう。

最後に今後も一般から誤解を招きかねない事について、注意を喚起したい。それは、原子力関係者のいう「安全」という言葉の意味についてである。我が国の原発が、技術的にもまた運転の態度においても、安全上レベルが高い事は、内外から認められるところとなっているが、関係者がその「例証」として挙げる事実のなかには、本当の意味の「安全」とは無関係のものが少なくない。たとえば、日本の原子力発電所の燃料棒は念入りに作られ（それ故値段も高いが）内部の放射能が冷却水に漏れでるリークは十万本に一つもない。また、平常運転時の所外への放射能放出の制限は、敷地境界で（「放射線はどんな少量でも害がある」という仮定にたって）年間0.05mSv以下と定められているが、実際の運転では、その百分の一以下、測定にも掛からないという実績を続けている。・・・これらの実績値を外国の原発と比較した表は、しばしば日本の原発の「安全」の高さの説明に引用されてきた。これら実績の数字は「安全」と無関係と言ってもいいもののなのに、もしこの値を上回った時は、「安全神話崩れる」とか、「あわや崖っぷちの事故」といった新聞の大見出しが一面を飾ることとなる。（「もんじゅ」の場合も、そうだった。）

筆者は、原子力関係者のことを、皮肉と同情の混じり合った気持ちで「新人類」と呼んでみた。原爆の洗礼を受けて始まった原子力開発は、（他産業がどうあろうと）予見できる危険にはあらかじめ対策を講じ、放射能についても「基準まではいい」ではなくなるべく

低く、・・・と努力し、それには（国も会社も）金は惜しまず、でやってきた。しかし、これが惰性になった時、それは一種の誇り高く使命感にもえた完璧主義者の風情を呈し、見込み違いが起きた時など、恥ずかしさが先にたち、言わずがなのことを口走り、つまらぬ隠しをしたりもする。平素も普通の人々の耳にはギクリとするような言葉（一例「ガンの確率は低く無視できる」・・・）を使い、見学者に赤い服を着せて出口で放射能を計り「ゼロでしょう、こんなに安全！」と胸を張る。（これは最近だいぶ「改善」？された由）・・。

原子力関係者が、普通の人としての顔と心をとりもどし、ここに挙げた幾つかの問題点について、己が考えを整理し、泥を被る事を厭わずに（内容はあくまでも正確に）普通の人々の胸に響く言葉で話せるようになる日は、何時のことであろうか。